

日本近代詩のリズム

御木白日

御木白日著

日本近代詩のリズム

芸術生活社

御木白日 みき しらひ

学習院大学文学部フランス文学科卒業

ソルボンヌ大学に学ぶ

大正大学大学院文学研究科国文学専攻 修士課程修了

大正大学大学院文学研究科国文学専攻 博士課程修了

文学博士

日本文芸家協会会員

日本ペンクラブ会員

PL学園女子短期大学教授

月刊『詩芸術』主宰

筆名 星ヶ丘美紀

著書 詩集『白日抄』『愛 限りなく』『続・愛 限りなく』『たち
どまる季節』 対談集『ちょっと失礼』
論文「日本詩歌の美意識に関する一考察」,「近代詩における
七五調と五七調のリズム」(『国語と国文学』昭和58年1月号)
などがある。

日本近代詩のリズム

定価 7,000円

昭和61年9月29日 第1刷発行

著者 御木白日

発行者 御木貴日止

発行所 株式会社 芸術生活社

〒150 東京都渋谷区神山町16-1

電話 03(469)1153 振替 東京 1-30670

印刷所 東洋紙業株式会社

© Shirahi Miki 1986 Printed in Japan

ISBN4-328-01238-X C3091 ¥7000E

『日本近代詩のリズム』に寄せて

御木白日氏が、日本近代詩のリズムの問題をテーマにかけて研究をつづけているのを、われわれは十年余りにわたって見まもってきた。一九七五年に発表された「日本詩歌の美意識に関する一考察」が、その最初の、まとまった成果であった。御木白日氏は、その以後も、つぎつぎと研究成果を発表し、それらの実績のうえにたつて、このたび『日本近代詩のリズム』をまとめたわけである。同時に、この研究によって著者は、文学博士（正大学）の学位を得た。同学のわれわれとして、よろこびにたえない。

詩人でもある著者が、学者者としても、このテーマにとり組むのは充分に理由のあることでもあるが、同時に実作者がみずからの詩作体験をふまえつつ、その理論化にすすみ出ることには思いがけぬ困難や苦渋やが、そのプロセスにあらわれたはずである。そこを、著者はみごとに克服し、処理している。先学の、等時性の拍音形式の理論を、詩人としての著者じしんの実作体験によって肉づけしつつ生きいきと処理している。「形想不可分」のかんがえかたの部分に、その特色は明らかにあらわれている。

いうまでもなく本書は、学術論文であるから、それとしての厳密な性格を具備していることも当然のことであ

る。明治以来現代に至る主要な韻律論に言及するのみならず、ほとんどそのすべてに對し、著者の独自の理論にもとづいて的確な批判をくわえている。

日本近代詩理論史において、韻律論は、かならずしも豊かな成果を誇っているものではない。それは、逆に言えば、音数律を基本とする、古典的な定型的日本詩歌を対象としての韻律研究は成果乏しく終らざるをえなかったためであるだろう。しかし、七五・五七調を破壊して、散文調自由律詩が主流となりはじめた、明治末年以後の詩形式の出現においてこそ、韻律の問題は中心のテーマとならざるをえないものであった。リズム単位の句から行への發展についての考察において著者は、固定的な音数律形式と、自由な散文律形式との断絶と連続とのダイナミズムを、あざやかに解決したのである。

つまり、この書における理論は著者の、学者としての探究心と良心、そして詩人としての創造性と発想とが、よく生きて結びついたうえで、達成しえたものである。かくして、古典的な定形詩と、近代自由詩との間に、一貫した韻律の内在的支配が存在するという著者の理論は完結したのである。

本書の完成を、かさねてよるこぶとともに、日本近代詩のリズムの問題を考究するための、今後の学徒のためにも、本書は有益な礎石として役立つものと信ずる。

一九八六年三月

久保田 正文

目

次

序……………	9
--------	---

第一章 近代リズム論の展開と考察……………	13
-----------------------	----

第一節 日本詩歌におけるリズム研究の基底……………	15
---------------------------	----

第二節 国語リズムにおける音数律の優位……………	36
--------------------------	----

第三節 音数律論とその限界……………	80
--------------------	----

第四節 等時的リズム認識……………	116
-------------------	-----

第五節 等時的認識に基づくリズム諸機能の統合……………	139
-----------------------------	-----

第二章 近代詩を底流する詩的リズム……………	159
------------------------	-----

第一節 近代詩におけるリズム研究の争点……………	161
--------------------------	-----

第二節 音数律を超越する等時性のリズム……………	196
--------------------------	-----

第三節	近代定型詩の推移にみる詩的リズムの普遍性……………	235
第四節	定型詩から自由詩へ——リズム単位としての「句」と「行」——……………	269
第三章	自由詩における等時性のリズム……………	313
第一節	川路柳虹——模倣期の自由詩……………	315
第二節	高村光太郎——口語自由詩の手法とリズム……………	334
第三節	萩原朔太郎——詩と詩論にみる音楽性……………	368
第四章	日本詩歌のリズムの底流……………	405
第一節	口誦詩歌のリズム……………	407
第二節	記載詩歌のリズム……………	419
結語	……………	440
あとがき	……………	444

日本近代詩のリズム

序

詩に限らず、芸術一般を語るときに、どうしても避けることのできないものにポエジー、イメージ、リズムなどがある。

これらはまた、それぞれに広範囲に使われる言葉でもある。

ポエジーは、別に「詩的精神」、あるいは「詩の本質」などともいわれているが、ポエジーというのは表現者個人の心の底に常にゆらめいている炎のようなものであって、その炎のようなものは換言すれば人間の心に根ざすセンチメントとも言い得るであろう。その心の底のゆらめきであるところのポエジーが、物事に触発され、感動となりイメージ化してゆく、そのイメージを音色、拍子などによって表すと音楽となり、粘土その他の素材をもつて形に表すと彫刻となり、色彩で表すと絵画となる。そして又、それを文字であるいは音声で表現すると文学になる。これらがいわゆる芸術である。すべての芸術は、その個人個人のイメージの造型による自己表現であるといえよう。その中で詩は言語を媒体とした一芸術であり、作者のイメージを言葉で組み立て、詩的リズムにのせて表現したものである。つまり、作者がイメージするところのものを言葉と言葉の結合によってリズムカルに形式にのせて表出したものが詩であるということになる。無論、それは先に示したように詩のみに限ったことではない。ポエジー、イメージ、リズム等は、人間表現のあらゆる芸術の根底に潜み、重要な意義を有するものと言っても過言ではないと思われる。

詩とは何であろうか、詩のリズムとは一体どういうものかということ、極めて素朴な疑問ではあるが、詩作を試みる者ならば常に心の隅にかかっている問題でもあろう。詩に関する定義は古くからいろいろなされている。「詩は人間の叫びの一種」であるとか、それは「生命の躍動である」とか、その意見の多くは詩人個人の達観に基づくものであり、その意味でいかにも独創的である。しかし、これが、詩を論じることになると、そこにある程度の方向性が求められなければならない。詩は従来、内容面と形式面とから論じられることが一般的なのであるが、いつの場合も両面から論が尽くされてきたかといえ、そこに疑念を禁じ得ない。形式に関する論議は、文語定型詩の隆盛期においてこそ詩壇の重要な問題として取沙汰されたものの、そのうちのリズム問題一つを取っても、それは未解決のままあたかも収束してしまっただけに見える。それが定型詩から自由詩に移行してくると、逆に内容の面からのみ詩は語られることが多くなってきた。それは詩の形式が、余りに複雑多岐にわたるため、従来の形式論ではそれらを到底把握し得なくなつたからに外ならない。しかし詩はその内容と形式をともなつてはじめて詩としての表現が成立するのであって、形想のいずれか一面だけがいかに充実にいても、詩作品の全き感得、理解は果たせないのである。形と想とが一致してはじめて詩のリズムが脈打つのであるといえよう。

ところで、そのリズムの把握が困難に思われる自由詩についてであるが、今日自由詩といわれているものとりズムとの関わりはいかに考えられるであろうか。それらを詩たらしめているもの、すなわち現今の自由詩がもつべき詩のリズムは果たしてどうなっているのだろうか。それらは確かに過去の定型詩に見られるような形態を全く失つてはいるものの、実際に自由詩を誦読するときには、その作品の良否は別として、それぞれの詩のもつ美感を感得しながら読み進み、その間に詩を味わっているように思われる。その美感の由来するところは、やは

りその詩の有するリズムに多くを負っているはずである。ヴァレリーの、「詩はまず声に出して読め、まずは詩に従え」(文学論集)の言葉通り、声に出して読んでみると、詩のリズムのありようは更によく理解できるようなある。こうした観点からするならば、現代詩といわれる自由詩にもリズムは明らかに存在していると見做されよう。とすれば、そこからリズムの本質も必ずや導き出されるに違いないと思うのである。

自由詩のリズムとは一体何であろうか。一貫して詩の底流をなすリズムとは何なのであろうか。このような疑問から、本論文では詩のリズムについてあたう限りの考察を加え、定型詩自由詩を通して日本詩歌に一貫して流れているリズムがどのようなものであるか、いささかでも解明できればと願うものである。

第一章

近代リズム論の展開と考察

